

ウミガメの話題から

内 田 至

Protection of the Green Turtle

and the Hawksbeak

by Itaru Uchida





ウミガメの話題から 内田 至

Photo by George H. Ecolozs.

■ 陸に上がるウミガメ

5年前のことです。ウミガメの調査でインドネシアに行ったおり、首都ジャカルタから自動車でボゴールへ向かいました。ボゴールには、オランダが統治時代につくったすばらしい熱帯植物園があるので有名です。と同時に、そこは動物学博物館と国立の農業大学の所在地でもあるのです。私の目的は、農業大学の水産学部にウミガメに興味をもっている若い研究者がいることを聞いたので、調査の前に会っているいろいろと知識を得ておくためでした。

ブーゲンビリアの花が咲き乱れる構内の一室で待つことしばらくして、その若い人を紹介されました。

話しがウミガメの飼育のことになったとたん



Protection of the Green Sea Turtle
and the Hawksbeak
by I. Uchida.

に彼は目を輝かせ、目下飼育中のアオウミガメの子を見ないかということになり、飼育実験室に案内されました。ところが、ほら、スマトラの東部で採集してきたアオウミガメの子ですよと言って、彼が手のひらの上に取りあげたマッチ箱ほどの子ガメを見てビックリしました。それはアオウミガメの子ではなく、まぎれもないタイマイ（別名ベッコウガメ）の幼体であったからです。これは、文献や資料の入手しにくいところでおきる間違いです。多くの標本を見ていないと、水族館の慣れた飼育係員でさえタイマイの幼体とアカウミガメの幼体の区別を間違えることもありますから、仕方のないことかもしれません。

これと同じような例は、わが国にもたくさんあります。とくに多いのは、やはりアオウミガメの未成体とタイマイの未成体との混同です。それは、これらのウミガメを甲の紋様や色彩から区別しようとするのが原因のようです。

例えば、アオウミガメには背甲の鱗板に、と

きどき放射状の後光が射したような模様のあるものがあります。いつ頃、誰が言い出したのかわかりませんが、この模様からこれをアサヒベッコウなどと呼んだりしたために、これをタイマイと勘違いして解説してあるのを見たこともあります。

また、つい先日みたウミガメの解説記事の中にも次のようなものがありました。「……ウミガメ類は、ふ化後ひとたび海に入ると、雌は成長してから産卵の際に上陸するが、雄は一生涯、陸に上ることなく海中生活を送る……」という解説です。何かウミガメ類の生態を言い得た、もっともらしい解説のように思われますが、どうやらこの解説も誤りのようです。

それは、ハワイ大学のバラズさんをココナツ島の臨海実験所にたずねたときのことで、彼がアオウミガメの生態研究のフィールドにしている、ハワイ群島のサンゴ礁の無人島で写した一枚の写真を見せられたとき、私は息をのむほどおどろきました。真白いサンゴ礁の海浜に、真昼間たくさんのアオウミガメが上陸して、甲羅ぼしをしながら休んでいるではありませんか(表題写真参照)。それは、産卵上陸とはあきらかに違います。波打ち際のちょっと上のところで、ウミガメが休んでいるのです。

産卵上陸の際にウミガメがみせる、あの用心深い行動からすれば、日中砂浜に上陸し、気持ち良さそうに熱帯の陽光の下でまどろむ姿などは、ちょっと想像できませんでした。それでも、波打ち際よりずっと離れたところまで上陸しているものが少ないのは、用心深いウミガメの習性のあらわれかもしれません。要するに、アオウミガメは、上陸を邪魔するものがないとき、昼日中でも産卵行動とは関係なしに静かな海岸に上陸するということが、この一枚の写真からはっきりしたわけです。

その上、おどろいたことにウミガメは、ハワイモンクアザラシ (*Monachus schauinslandi*) やクロアシアホウドリ (*Diomedea niaripes*) といっしょに昼寝を楽しんでいます。この場所

は、まさにウミガメやアザラシや海鳥の楽園といってもいいのではないのでしょうか。今の世に、このような島が存在することすら珍しいことだと思われれます。

甲羅ぼしと昼寝に上陸してくるウミガメにはオスもメスもいるようです。このような写真を見せられては、先ほどの解説記事などは顔色ありません。静かな、カメにとって敵のいない海岸さえあれば、アオウミガメは産卵行動に関係なく上陸するのではないかと思われれます。

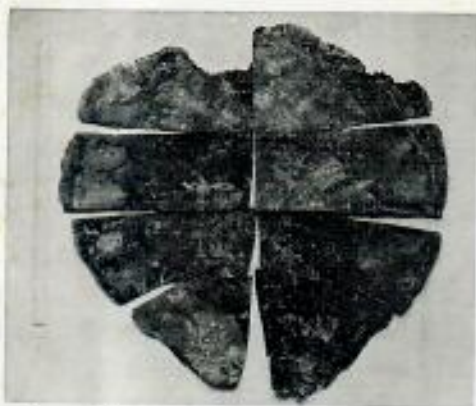
しかし妙なことに、現在このような島が発見されているのは、いずれも太平洋岸だけからで大西洋岸からは一例の報告もありません。太平洋岸のアオウミガメは海浜で午睡を楽しむけれど、大西洋のカメは甲羅ぼしや昼寝をしないということなのでしょう。面白い現象だと思われれます。私たちがホッとさせられるのは、現在これらの島々は、アメリカ政府の野生動物保護機関や沿岸警備隊の厳重な監視下におかれ、研究者以外は近づけないことです。絶海の孤島の、しかも、強力な行政の保護下でのみ、ウミガメは甲羅ぼしや昼寝が可能なのでしょう。これらの島々のウミガメやアザラシの眠りを破りたくないものです。

■ 甲を剥がれたウミガメ

さて、もう一つウミガメの話題を紹介しましょう。

今年の5月頃です。古くからベツ甲細工の原料となるタイマイの甲羅を輸入しているAさんから、最近マレーシアから輸入した原料中に変なタイマイの甲が混っていたので見に来ないか、という連絡がありました。

タイマイの甲は、その学名 (*Eretmochelys imbricata*) にも示されているように、甲の鱗板の1枚1枚が屋根瓦のように重なっている (imbricate) とところが、他のウミガメ類の甲と著しく違っている点です (タイマイの中には、甲が屋根瓦状に重なっているものばかりではなく、敷石状になっているものもあります)。



8つに切断されたタイマイの背甲（元来は1枚の背甲であった）。甲の縦が約70cm。

Carapace of a hawkbeak cut into 8 pieces.
Total length was 70 cm.

我が国に東南アジアからこの甲が輸入される場合は、ふつう一匹の甲から大きな鱗板を13枚とり、それらに孔をあけてつづりあわせ、一匹分ずつまとめた上で送られてくるようになっています。ところが、Aさんがみせてくれた甲は全部で8枚の鱗板しかありませんでした。もっとも鱗板の数の異常はときどきみられますので、数だけを問題にするのであれば、そんなに珍しいことではありません。

しかし、この8枚の“鱗板”をよく見ると、どうやらこれは、もともと一枚の甲をノコギリで切断して8枚の甲の小片に分けたものであることが判りました。13枚に切断すると、一片が小さくなりすぎるので8枚に切断したようなのです。つまりこれは、ウロコ状の鱗板がなく、のっぺりとした一枚板のようにになっている甲をもったタイマイが捕まったので、この甲を剥がして、わざわざ8枚に切断し、あたかも普通のタイマイの甲のように見せかけて送られてきたものだったのです。

まず、こんなガメがどこで捕れたのか疑問を持ちましたので、Aさんに調べてもらおうと、どうもマレーシアのサバ州にあるサンダカンに集荷されたものであることがわかってきました。サンダカン付近で、なぜこんな一枚板の甲をもったタイマイが捕れたのでしょうか。

いろいろ調べてみると、意外な事実がわかってきました。それは、お父さんの代からベツ甲の加工をやってきたTさんが、昔、お父さんから聞いた話だけれどもと書いて語ってくれた内容です。それによると、昔、サンダカンのベツ甲集荷人（主として華僑）が、タイマイの甲をとるときに、その都度タイマイを殺してしまうのではもったいないと考え、生きたままタイマイの甲から鱗板を剥がし（多分、熱を加えて柔らかくしてから剥がしたと思われる）た後、因幡の白兎のようになったタイマイの背にコールタールを塗って放流することを試みたというものでした。

この荒唐無稽とも思える資源保護の方法がいつ頃までおこなわれていたのかははっきりしませんが、ウミガメの中でも比較的定着性のあるタイマイの生態から考えると、この時に捕れたタイマイは、その処置を受けたタイマイが生き残っていたものである可能性があります。

ウミガメの研究者の多くは、甲を剥がされたウミガメは生存が難しいのでは……と考えていたのですから、このように甲を剥離され、コールタールを塗られて放流されたタイマイが、その後生きつづけ、甲が再生したとなると、これはたいへん貴重な記録になります。それにしても、13枚の甲を抜き取られたタイマイの背甲が再生してくるとき一枚の枚のような甲になるとは……。こんな残酷な実験は、いままで誰もやっていないのでわかりませんが、資源の再生産という点からは関心のもたれるところです。

幸い、今年の秋にインドネシア、マレーシアでウミガメの調査に従事する機会に恵まれましたので、私はサンダカンを訪れるのを楽しみにしているところです。

（姫路市立水族館長）

表紙写真の掲載にあたっては撮影者ジョージ・バラズ氏のご厚意を受けました。